

# 不登校および学校不適応傾向の児童生徒に対する アニマルセラピーのプログラム(HAATP)

長野県動物愛護センター まつざわよしみ 松澤淑美 傳田修一 小山淳一 有賀良次 藤沢英一  
小林雅巳 藤森令司 川村昭道 小野祥平 増山浩一

## 【はじめに】

動物とのふれあいが人にもたらす効果については、身体的効果<sup>1)2)</sup>と精神的効果<sup>3)</sup>等が過去に報告されている。また、子供と動物との関係は、子供の社会的・情緒的発達に重要な影響を与えていると言われている。子供の共感性、自尊心、自己統制感、自律性は、動物を育てることで養われるという報告<sup>5)</sup>や、子供のパーソナリティの発達に有益だと考えられた報告<sup>6)7)</sup>などがある。また、家庭で飼養されている動物が、子供に対して果たす役割についての報告<sup>8)9)10)</sup>などもある。

特に動物の心理療法的な役割に対しては、1962年にLevinson, B.M.の「共同治療者としての犬」と題する報告<sup>4)</sup>によって専門家の注目が高まり、以来様々な研究がなされている。治療場面においては、重度の引きこもりを伴う統合失調症患者に、動物を用いた治療を行った報告<sup>11)</sup>や、情緒的な障害や知的障害をもった患者に対して、刺激を与えたり不適応行動を減少させるのに有効であったという報告<sup>12)13)</sup>もされている。特に子供は、治療者が連れてきた犬によって、リラックスして快適さを感じたことが明らかとなっている<sup>14)15)</sup>。

子供を対象としたアニマルセラピーの研究は、情緒障害や学習障害の子供と動物が接する活動や乗馬療法などが報告されている。我々は、平成12年より学校不適応傾向の児童生徒を対象としたアニマルセラピーのプログラムを作成し実施しているが、今回、医療機関の助言の元にその心理的効果についての分析を試みたところ若干の知見を得たので報告する。

## 【実施方法】

実施期間:平成17年4月から平成19年3月まで。

参加者:平成17年4月から平成19年3月までに長野県動物愛護センターに動物とのふれあいを目的で来館した校不適応傾向の児童生徒44名の中から、今試験に対して同意が得られた13名(平均年齢12.4歳、男性2名、女性11名)を対象とした。

手続き:4ステージからなるアニマルセラピーを2週間に1度の割りで1回4時間(午前2時間、午後2時間)実施した。また心理テストとしてPOMS(Profile of Mood States)とAN-EGOGRAM(小児AN-EGOGRAM)を各ステージが終了した時点で実施した。POMS(Profile of Mood States)は、気分や感情を「活気」、「緊張・不安」、「疲労」、「混乱」、「抑うつ・落ち込み」の6つの尺度で定量的に評価するものである。また自我状態を評価するAN-EGOGRAMは、以下の5つの自我状態を測定するために使用された。「養育的な親の自我」すなわち「やさしさ」を表すNP、「自由な子供の自我」すなわち「無邪気さ」を表すFC、「順応する子供の自我」すなわち「素直さ」を表すAC、「批判的な親の自我」すなわち「きびしさ」を表すCP、「大人の自我」すなわち「理性」を表すA。

### アニマルセラピーの実施手順:

- (1)対象者の面接:対象者は、保護者または同伴者(相談支援員、スクールカウンセラー等)と同行して当施設に来館した。個室で簡単な面接を行い、「心理テスト」について十分な説明を行った。今回は、同意が得られた13名に対しテストを実施した。
- (2)動物への反応の観察:当施設で飼養する動物とのふれあいを実施し、動物に対する反応(興味の有無、接し方、触る、話しかける、手からフードを与える、感情の投影、排泄に対する拒否反応等)を観察・記録した。
- (3)動物の選択と育成:動物は、ふれあい活動適性診断基準(表1)により選定し、好ましい行動を強化する方法で育成した。
- (4)環境設定:医療機関の助言のもとに、対象者個人に応じた環境を設定した。(表2)
- (5)プログラムの作成:対象者の動物に対する反応から判断し、個人に応じた内容のプログラムを作成した。プログラムは、4つのステージに分類し、経過を観察した。(表3)
  - 1)ステージ(そのままの自分で):犬・ねこ・うさぎ・モルモット・ヤギのうち自分の希望する動物とのふれあい、自分の好きな動物の絵を描く、折紙を折る、動物の話をする等
  - 2)ステージ(必要とされている自分):子犬・子ねこの給餌、飼養室の清掃、うさぎ・モルモット・ヤギの世話、犬のグルーミング・運動、子犬・子ねこの社会化補助等
  - 3)ステージ(自分の役割):成犬のトレーニング、特定の個体の世話を担当、当施設館内掲示物の作成・展示等
  - 4)ステージ(社会参加):一般来館者と動物とのふれあい補助、当施設でのボランティア活動、動物介在訪問活動への参加等

- (6) プログラムの開始: ステージ 導入時の実施場所は、一般来館者の立ち入らない動物飼養スペース(バックヤード)または個室とし、緊張が緩和し安心感が得られるよう配慮した。実施中は当施設スタッフが付き添い、対象者が退館後、記録表に記録した。
- (7) プログラムのステップアップ: 対象者を観察し実施内容をステージ から 、 、 へとステップアップさせた。毎回当施設スタッフが付き添い、継続して記録を行った。
- (8) 評価: 経過観察項目(心理テスト)は、POMS(Profile of Mood States)と、AN-EGOGRAM(小児AN-EGOGRAM)を各ステージが終了した時点で実施した。

今回は、13名の対象者のうちステージ を終了している10名(平均年齢12.4歳、女性10名)について、アニマルセラピーのプログラム導入前とステージ 終了時に実施した結果を比較した。

### 【結果と考察】

今回我々が、学校不適応傾向の児童生徒に対するアニマルセラピーの心理的効果についての分析を試みた結果は下記の通りであった。

- 1、POMS: アニマルセラピー導入前低値であった「活気」が 38.2 44.6%へと有意に上昇した。一方、「緊張・不安」が 54.6 45.4%、「疲労」が 57.0 50.4%、「混乱」が 59.2 55.2%へと有意に減少した。このことは、アニマルセラピー導入後、緊張感が減って、リラックスできるようになり、疲れやすさや思考力の低下などが減って、元気が出てきたことを意味していた。  
「抑うつ・落ち込み」は 62.3 60.2%、「怒り・敵意」は 56.9 55.5%へと低下したものの有意差は認めなかった。
- 2、自我状態を評価する AN-EGOGRAM では、「養育的な親の自我」すなわち「やさしさ」を表す NP が 44.4 55.1%、「自由な子供の自我」すなわち「無邪気さ」を表す FC が 48.3 61.9%、「順応する子供の自我」すなわち「素直さ」を表す AC が 52.8 42.7%に有意な変化を認めた。自我状態については、導入前は AC が FC より高いことから、周囲の顔色を気にして自分を表現できずストレスを溜めやすい状態にあったと言えた。導入後は、FC と AC が逆転したことにより、自分を肯定しストレスをためにくく発散しやすくなったことを意味した。更に、NP が上昇し、優しさや思いやり、他人を愛し守り保護するという自我が高まった。従って、アニマルセラピー導入後、子供達の自我状態が安定したことが認められた。  
「批判的な親の自我」すなわち「きびしさ」を表す CP は 30.9 39.3%、「大人の自我」すなわち「理性」を表す A は 44.7 47.8%と上昇したが有意差は認めなかった。
- 3、当施設を訪れる学校不適応傾向の子供達は、元気つまりエネルギーレベルが低く、他者とのコミュニケーションを不得手としている傾向にある。こういった社会との接点が希薄だった子供達にとって、アニマルセラピーのプログラムは、他者とのコミュニケーションを開始するきっかけとして有効であったと考えられた。  
子供達は、動物たちに受け入れられる経験によって自己肯定感が得られ、また、人と人との間に動物が介在することによって、安心して、自然に、他者とのコミュニケーションが取りやすくなったと考えられた。
- 4、今回、学校不適応傾向の児童生徒を対象とした本事業を、「アニマルセラピーの心理的効果」として検証できたことは大変有意義であり、今後、本事業の継続と更なる充実を図り、子供達の明るい未来のため、そして動物達の命の大切さを伝えるため、研鑽を積み社会に貢献したいと考える。

最後に、ご指導いただいた特定・特別医療法人慈泉会相澤病院心身医療センターの飯田俊穂、熊谷一宏両氏に深謝いたします。

表1 動物ふれあい活動適性診断基準

<犬>

- (1) 適正な健康管理がなされている。
- (2) 初対面の人に対して過剰に反応しない。
- (3) 他の動物に対して過剰に反応しない。
- (4) 基本的な合図(オスワリ、フセ、マテ、オイデ)を理解している。
- (5) 人混みの中でも落ち着いて歩くことができる。
- (6) クレートやキャリーバッグの中で落ち着いていることができる。
- (7) 排泄のしつけができています。
- (8) 見知らぬ人に触られることに対して過剰に反応しない。
- (9) 子供の大きな声に対して過剰に反応しない。
- (10) 子供の急激な動作に対して過剰に反応しない。
- (11) 子供に触られた時落ち着いていることができる。
- (12) 初対面の子供に対して拒むことなく注目できる。
- (13) 子供と楽しそうに遊ぶことができる。
- (14) 犬自身が進んで子供の合図に確実に従う、又は合図が不明瞭であっても積極的に注目する。

適性診断基準は、(社)日本動物病院福祉協会の認定基準に準じた7項目(1)~(7)に当センターの基準7項目(8)~(14)を追加

して作成した。

<ねこ、うさぎ、モルモット、ヤギ>

- (1) 適正な健康管理がなされている
- (2) 人に対して過剰に反応しない。
- (3) 他の動物に対して過剰に反応しない。
- (4) 見知らぬ人に触られることに対して過剰に反応しない。

### 表2 環境設定

- 特定の環境に こだわり があれば、それを除いた環境設定とする。
- 同年代あるいは不特定多数の人や特定の風貌の人に抵抗があれば配慮する。ステージ 導入時の実施場所は、一般来館者の立ち入らない動物飼養スペース(バックヤード)または個室とし、緊張が緩和し安心感が得られるよう配慮する。対応するスタッフは、動物のことを熟知し、動物の許容範囲を超えない対応ができる。
- 対応するスタッフは、子供独特の感受性に敏感に反応できる。
- 成犬の場合は、犬自ら対象者との遊びに集中するよう設定する。
- 不慮の事態でも、直接動物に危害が及ばないよう危機管理をする。
- 対応するスタッフは、対象者に対して、否定・指導・激励・同情的態度で接しない。
- 対応するスタッフは、対象者に対して肯定的態度で接する

表3 ハローアニマルAATプログラム(HAATP)

ステージ	テーマ	内 容	期待する効果
ステージ	そのままの自分で	犬・ねこ・うさぎ・モルモット・ヤギのうち自分の希望する動物とのふれあい、自分の好きな動物の絵を描く、折紙を折る、動物の話をする等	緊張緩和 無条件の受容 癒し、自己肯定感 安心感、満足感
ステージ	必要とされている自分	子犬・子ねこの給餌、飼養室の清掃、うさぎ・モルモット・ヤギの世話、犬のグルーミング・運動、子犬・子ねこの社会化補助等	充実感、達成感 愛情の受け与え 感情の表出 セルフコントロール 運動不足解消
ステージ	自分の役割	成犬のトレーニング、特定の個体の世話を担当、当施設館内掲示物の作成・展示等	責任感 周囲への肯定感 現実感、信頼感
ステージ	社会参加	一般来館者と動物とのふれあい補助、当施設でのボランティア活動、動物介在訪問活動への参加等	他者とのコミュニケーション

### 参考文献

- 1) Katcher,A.H.,Friedmann,E.,Beck,A.M. and Lynch,J.J. Talking, looking and blood pressure: Physiological consequences of interaction with the living environment. In A.H.Katcher and A.M.Beck(Eds) New Perspectives on Our Lives with Companion Animas. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, pp. 351-359,1983
- 2) McCulloch,M.Animal-facilitated therapy: Overview and future directions. In A.H.Katcher A.M.Beck(Eds) New Perspectives on Our Lives with Companion Animas. Philadelphia: University of Pennsylvania Press,1983
- 3) Francis,G.,Turner,J. and Johnson, S. Domestic animals visitation as therapy with adult home residents. International journal of Nursing Studies, 2293, 201-206, 1985. Katcher,A.H.,Friedmann,E. Potential health value of pet ownership. Compendium on Continuing Education for the Practicing Veterinarian, 2, 117-122,1980.
- 4) Levinson,B.M. The dog as co-therapist. Mental Hygiene, 46, 59-65, 1962.
- 5) Levinson,B.M. Pets and Personality development. Psychological Report, 42, 1031-1038, 1978.
- 6) Veevrs,J.E. The social meaning of pets: Alternative roles for companion animals. In B. Sussman(Ed.) Peta and the Family. New York: Haworth,pp.11-130,1985.
- 7) Bossard,J.H. Domestic animals: their role in family life and child development. In J.Bossard(Ed.) Parent and Child: Studies in Family Behaviour. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, pp. 236-252,1953
- 8) Levinson,B.M. Pets: A special technique in child Psychotherapy. Mental Hygiene ,48, 243-244, 1964.
- 10) Levinson,B.M. Household pets in residential schools: Their therapeutic potential. Mental Hygiene, 52,411-414, 1968.
- Robin,M., ten Bensel,R., Quigley,J., and Anderson,R. Childhood pets and the psychosocial development of adolescents. In A.H.Katcher and A.M.Beck(Eds) New Perspectives on Our Lives with Companion Animals. Philadelphia: University of Pennsylvania Press,pp. 436-443, 1983
- 12) Siegel,J., 1962, op. cit. Siegel, J. The journal investigates: Pet therapy, an unlighted path. Journal of Small Animal Practice, 5 275-279,
- 13) Levinson,B.M. The value of pet ownership. Proceedings of the 12<sup>th</sup> Annual Convention of the Pet Food Institute, 12-18, 1969.
- 14) Brown H.M. Intrusion and interaction therapy for riders with autism. NARHA Strides magazine;2(3),1996.
- 15) Levinson,B.M. Pet-oriented Child Psychotherapy. Springfield, IL; Charles C. Thomas, 1969
- 16) Levinson,B.M. Pets and Human Development. Springfield, IL; Charles C. Thomas, 1972